

「特別の教科 道徳」における問題解決的な学習と評価の研究

遠藤 信幸²⁾ (代表者)

永田 繁雄¹⁾ 松尾 直博¹⁾ 面川 怜花³⁾ 川井 優子⁴⁾ 齋藤 大地⁴⁾ 幸阪 創平⁵⁾

1) 東京学芸大学

2) 東京学芸大学附属小金井小学校

3) 東京学芸大学附属世田谷小学校

4) 東京学芸大学特別支援学校

5) 杉並区立浜田山小学校

目 次

1. 研究の目的	20
2. 研究の内容	21
3. 研究の計画	22
4. 研究の実際	22
4. 1. 小学校低学年	22
4. 2. 小学校高学年	26
4. 3. 特別支援学校	31
5. 研究の成果と今後の課題	35
6. 参考文献	35

「特別の教科 道徳」における問題解決的な学習と評価の研究

遠藤 信幸²⁾ (代表者)

永田 繁雄¹⁾ 松尾 直博¹⁾ 面川 怜花³⁾ 川井 優子⁴⁾ 齋藤 大地⁴⁾ 幸阪 創平⁵⁾

- 1) 東京学芸大学
- 2) 東京学芸大学附属小金井小学校
- 3) 東京学芸大学附属世田谷小学校
- 4) 東京学芸大学特別支援学校
- 5) 杉並区立浜田山小学校

1. 研究の目的

平成27年7月に告示された「小学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編」の「第4章 指導計画の作成と内容の取扱い 第2節道徳科の指導」の中に「問題解決的な学習、体験的な活動など多様な指導方法の工夫をする」とある。そして、「第3節 指導の配慮事項」の中には「5 問題解決的な学習など多様な方法を取り入れた指導」として、道徳科の問題解決的な学習とはいかなるものであるのか規定されている。道徳科の問題解決的な学習とは「ねらいとする道徳的 諸価値について自己を見つめ、これからの生き方に生かしていくことを見通しながら、実現するための問題を見付け、どうしてそのような問題が生まれるのかを調べたり、他者の考え方や感じ方を確かめたりと物事を多面的・多角的に考えながら課題解決に向けて話し合うことである。そして、最終的には児童一人一人が 道徳的諸価値のよさを理解し、自分との関わりで道徳的価値を捉え、道徳的価値を自分なりに発展させていくことへの思いや課題が培われるようにすることである」とある。道徳の指導の一つとして「問題解決的な学習」について規定されたことよって、現場の教師は困惑が隠せない。そもそも、道徳の時間は「問題解決」の授業展開ではなかった。教材の人物に自己関与させ、自分の生き方なり方を見つめる授業の在り方が一般的であった。この道徳科としての「問題解決的な学習」をどのように考えて、子どもたちにとって学びのある授業として構成していくのが課題といえる。

そして、道徳科に向けて「問題解決的な学習」と共に話題となっている問題として「評価」があげられる。道徳科における評価の在り方として「「特別の教科 道徳」の指導方法・評価等について(報告)」では、道徳の評価についていくつか記載されている。その中で一部抜粋する。「学習活動における「児童(生徒)の学習状況や道徳性に係る成長の様子」を、観点別評価(分析的に捉える)ではなく個人内評価として丁寧に見取り、記述で表現することが適切であり、具体的には個人内評価を記述で行う」「観察や会話、作文やノートなどの記述、質問紙などを通して、一面的な見方から多面的・多角的な見方へと発展しているか、道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めているか」とある一定の評価の基準が示されている。しかし、実際の子どもたちの姿から考えた場合に、具体的な事例や評価の文言がないため、どのように評価として書けばよいのか分からないのが現状である。

「特別の教科 道徳」の実施に向け、「問題解決的な学習」と「評価」の在り方について研究を行い、その理解を深めていく。

2. 研究の内容

東京学芸大学附属小学校、特別支援学校の児童・生徒を対象とした読み物資料を中心とした教材を活用した道徳科の授業実践を通して、道徳科における「問題解決的な学習」の授業モデルと評価の在り方を提案し、研究報告書や日本道徳教育学会等で発信することを目指していく。研究の視点として、以下のAからの内容を取り上げ、各学校の実態に即した授業を実践し、その研究内容や成果を附属学校研究会（小金井地区）で検討する。

A. 道徳科における「問題」の捉え方

「『特別の教科 道徳』の指導方法・評価等について（報告）」では、問題解決的な学習における道徳的な問題について以下の4つが記されている。

- ①道徳的諸価値が実現されていないことに起因する問題
- ②道徳的諸価値について理解が不十分又は誤解していることから生じる問題
- ③道徳的諸価値のことは理解しているが、それを実現しようとする自分とそうできない自分との葛藤から生じる問題
- ④複数の道徳的価値の間の対立から生じる問題

これらを子どもたちの生活レベルに照らし合わせて考えると、②③④の文言が子どもたちにとっても考えやすいのではないだろうか。①「道徳的諸価値が実現されていないことに起因する問題」というのは、発達段階を考えた場合、低学年にとっては難しい問題であり、そもそもの答えが個々に内在していかないのではないだろうか。②③④の文言を具体的な授業において用いるとすると以下のようにとらえ直すことができる。

- ⑤道徳的価値についての理解を深める問題
- ⑥道徳的価値に関わる自己の在り方を深く見つめる問題
- ⑦教材から生まれる複数の道徳的価値の間から生まれる問題

このような問題を具体的な授業において設定していく。

B. 問題を解決するための学習指導過程

「道徳的な問題」を授業の中に設定していくが、1年目は子どもたちの実態を踏まえ、一定の箇所を設定することはしない。授業者が子どもたちの実態を踏まえて、子どもたちに何を考えさせたいのかを明確にした授業展開の中で個々が問題を学習の中で設定していく。子どもたちが問題を把握しやすい箇所やその問題の作り方は授業者の授業プランにもよるが、授業者が考えさせたいこととして「問題」を提示することをそれぞれの実践でそろえて行う。

C. 問題を生み出す教材の活用

「問題解決的な学習」が道徳の授業において行われている際に危惧することは、子どもたち自身に「問題」を作らせていくような授業である。その問題というの「話し合いたいことある？」等、学級で起こっている様々な問題を授業の問題とすることである。子どもたちが道徳的価値な価値について自らの生き方や在り方を見つめ直すことができるような問題を生み出すために、教材を用いながら自己関与させ道徳的問題を追及させていく。読み物教材に限らず、子どもから問いが生み出されるような教材を活用していく。

D. 個人内評価に生かす教材の使用

授業においての子どもたちの発言や思考の流れを個人内評価に生かしていけるように、各授業者が蓄積していく。毎時間にワークシートを用い、個々の子どもたちの学習履歴としていき、評価に生かしていく。

3. 研究の計画

東京学芸大学附属小学校、特別支援学校の子どもたちを対象した道徳科の授業実践の評価・改善を通じた授業づくりから、教材を活用した道徳科の授業モデル・評価の在り方を構築する。

【1年次】プロジェクト研究の企画と授業実践Ⅰ（平成28年度）

- ①プロジェクト企画会：研究計画の企画、日程調整、役割分担 等
- ②問題解決的な学習についての理論研究：書籍の調査、研究会への出席
- ③授業実践：小学校、特別支援学校ごとの授業計画の立案と実践、評価
- ④研究会：各校の授業実践の経過報告、協議、次年度への計画立案

【2年次】授業実践Ⅱと授業モデル・評価の構築（平成29年度）

- ①授業実践：1年次とは違う教材、学年等を考慮した授業計画の立案、実践
- ②研究会：各校の授業実践の経過報告、協議
- ③授業モデル、評価の検討：授業モデルも評価モデルの提案
- ④成果発表会、学会発表：授業実践事例集の作成、学会発表

4. 研究の実際

4. 1. 小学校低学年の実践

4. 1. 1. 小学校1年生 教材名「はちさんのみみつ」（みんなのどうとく1年 学研）

1) 主題名：「ありがとう」のきもち（C感謝）

2) 主題設定の理由

(1) ねらいとする価値について

そもそも、感謝という心はどのようにして生まれるのだろうか。自分の人生を振り返ってみると、「感謝」とは身近な人とかかわりの中で生まれ、時には自分自身に対して感じるものであった。生きていく中で迷ったり、悩んだりしたとき、また何かを達成できた喜びを感じたときなど、様々な場面において手を差し伸べてくれた人がいた。そうしたことを振り返る中で、自分が思っている以上にいろいろな人の支えがあって、いろいろな人から愛情をいただいて今、こうして生きているという感謝の心を感じるのである。また、それに言葉にして伝えてきたことによって、自分を支えてくれる人が増えたのも事実である。

今の子どもも自分のためになにかをしてくれるということが当たり前と感じやすい。それは、この便利な世の中が原因の一つではないだろうか。自分の欲しいものがいつでも手に入れられるという環境…望んだものがなかなか手に入らない時代を知らない私たちにとっては、「してもらって当たり前」と感じてしまうのは、ごく自然なことなのかもしれない。では、どうしたら感謝の心を育てていけばよいのか。私は、自分のためになにかをしてきたという具体的なことへの気づきがあれば、自然と「ありがとう」という言葉は生まれ、感謝の心が育つのではないかと考える。そして、その根底にある自分への愛情に気づくことがより価値を深めることになる。こうした道徳授業を積み重ねる中で、日常の中でも自ら自然に感謝の心が芽生える子どもになって欲しいと考える。

(2) 子どもの実態より

「ありがとう」という言葉はあちらこちらから聞こえては来るが、どこか形式的な言葉のやりとりに聞こえてしまう。自分のために何かをしてくれた人に対して言う「言葉」としては、概ね理解している。それがただの行為で終わらせないために、本時の学習を通して「ありがとう」という言葉について考えさせたい。

(3) 本時の教材について

くんちゃんは、毎日朝8時と午後3時にるうおばあちゃんに会う。1日2回も散歩をしているるうおばあちゃんに対して、ずるいと思っていたが、お母さんからるうおばあちゃんのみみつ（るうおばあちゃんは自分たちの登

下校を見守ってくれていた)を聞いたくんちゃんは、「はやく明日にならないかな」と眠りにつく。教材を通して、相手が自分のためにしてくれた事実とその相手の思いを感じさせる必要がある。そしてその根底にある、自分に対して相手が愛情をもって接してくれているという気づきから感謝の心が芽生えることを期待する。

3) 指導計画 「お相手さん活動を生かした学習計画」

時間	主題名	教材名	道徳的価値	他教科との関連
1	学校って楽しいな	めだかのめぐ	より良い学校生活、集団生活の充実	お相手さん活動 (異学年交流)
2	「ありがとう」の気持ち	はちさんのひみつ	感謝	
3	「ありがとう」の心を伝えること	かめさん、ありがとう	礼儀	

4) 本時の学習

(1) 本時のねらい

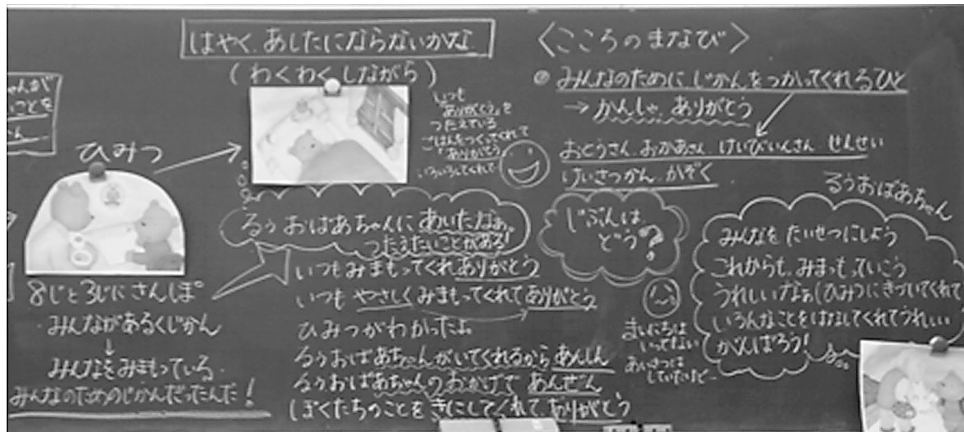
るうおばあちゃんのひみつを知る前後のくんちゃんの気持ちを理解し、自分の身近な人への感謝の気持ちもち、伝えようとする心情を育てる。

(2) 学習指導過程

	・予想される児童の活動 (○主な発問)	・留意点 *学びのつながり ☆評価
導入	[自分の生活を振り返る①] ・お世話になっているなあと思う人はいますか。	・自分の生活を想起させておくことで、資料を通して考えた後、より深く自己の振り返りができる環境をつくる。 ・自分の生活と友達の生活の共有をしながら、それぞれの生活を見つめる。
展開	[資料を読んで考える] <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">はやく るうおばあちゃんに会いたいのはどうしてだろう。</div> ○「るうおばあちゃんはいいなあ」というくんちゃんはどんなことを思っていたんだろう。 ◎「はやくあしたにならないかな」というくんちゃんはどんなことを考えていたのだろう。 ○実際に、るうおばあちゃんに会ったどうですか。役割演技 (るうおばあちゃんは、くんちゃんに言われたらどんな気持ちになるだろう。)	・おばあちゃんの日常と、くんちゃんの日常を比べさせ、おばあちゃんの日常のよさを考える。 ・ひみつを知ったくんちゃんの思いを考えていくなかで、るうおばあちゃんに会いたいくんちゃんの思いを考えさせる。 ・くんちゃんとおばあちゃん役を作り2人ペアで行う。また、役割を交代して行う。 [くんちゃん] ・ひみつがわかって嬉しいという喜びと共に、るうおばあちゃんへの感謝の気持ちが生まれたことを体験的に考える。 [るうおばあちゃん] *ありがとうと言われた人も、嬉しいという気持ちに共感させたり、「ありがとう」と感謝されることによって自分がしてきたことを肯定する機会になることを体験的に理解する。
終末	[自分の生活を振り返る②] <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">今の自分はどうか？ (自己の生活を振り返る①からの深まり)</div> ・じぶんのまわりに「ありがとう」を伝えたい人はいますか。また、「ありがとう」の気持ちを伝えてありますか。	☆自己の振り返りを通して、「ありがとう」の気持ちを伝えたい人がいることに気付くことができたか。 *実際に「ありがとう」を伝えられているかどうか、自己を見つめ直し、ありがとうを伝えるよさについて考える。

5) 授業の実際

くんちゃんとするうおばあちゃんの両者の役に分かれて演技をすることにより、どちらの思いも疑似体験を通して考えることができた。資料にあるセリフではなく、自由に話をさせることにより、子どもたち自身が思考を広げたり深めたりして考えを深めることができた。



4. 1. 1. 1. 今後の方向性と課題

「では、実際の生活ではどうだろう?」という問いに対して、はじめはほとんどの子どもが「ありがとう」と伝えている、と答えたが、再度問うと悩む子どもがでてきた。理由を聞くと、「言っているけれど、毎日ではない。」という。しかしその後の生活の中で、子どもたちが使う「ありがとう」に変化が生まれ、「ありがとう」という言葉に自分の思いをのせて伝えようとする子どもがでてきた。価値を理解し、道徳授業を通して考えたからこそ、相手に伝える言葉が加わったのではないか。道徳授業での学習が日常生活のこうした学びのつながりを生んだ。

4. 1. 2. 小学校1年生 教材名「二わのことり」(みんなのどうとく1年 学研)

1) 主題名: 友達に寄り添う心

2) 主題設定の理由

(1) ねらいとする価値について

仲良くするとはどういうことか。また、助け合うとはどういうことか。「仲良くする」とは、ただ一緒にいて、何かをつくり上げるだけでなく、その過程の中で、相手に寄り添うやさしい心を互いにもつことが大切だと考える。また、「助け合う」とは仲良くするという過程の中で、相手を思うやさしい心を実行することだと考える。どちらも、互いを認め合い、補い合いながら、一人では見えなかった景色や、一人ではできなかった経験があり、「友達がいたからこそできた」という共に学んだ実感としてとらえさせることが大切である。

「友達を助ける」という行為は、児童自身が経験の中ですでに知っていることであり必要だと感じているだろう。だから「友達と助け合うことが大切」と言うことも簡単にできるだろう。だが、実際にはどういう場面で助け合うということが起きたり、自分の行動や思いがそれにつながったりするかどうかはわかっていない。本授業では、まず、相手を思うやさしい心について十分考えさせたい。

(2) 子どもの実態より

本学級の児童は、4月当初の道徳開きで「どんな人になりたいですか。」という問いに対して、ほとんどの児童が心に関することについて発言していた。中でも「優しい人になりたい」という児童が多く、その優しさの対象は、主におじいさんやおばあさん、年上の人であった。この時からすでに、児童が相手を思って行動できる人になりたいという思いをもっていると担任自身も感じていた。ただ、その時、やさしさの対象に「友達」というキーワードはでなかった。

相手意識を育むために、道徳教育の中で役割演技を活用した学級経営を行ったり、他教科との連携を意識した道徳教育を繰り返したりしてきた。その中で「今まで学習した色々な心が、優しい心につながっている!」と発言する児童や、道徳の時間(自己を見つめる場面)で友達との喧嘩や言い合いから学んだことを、教材とつなげて話す児童が出てきており、友達を通して得た経験を学びとして受け止められるようになってきている。

(3) 教材について

同じ日にうぐいすとやまがらの両方から招待を受けたみそさざいは、はじめはうぐいすの家に行く。友達もたくさんいてとてもゆかいでごちそうも美味しい。けれど、みそさざいはやまがらのことが気になり、そっとうぐいすの家を抜け出し、やまがらの家へ行く。やまがらはひとりぼっちでしょんぼりしていたところ、みそさざいが声をかけると大喜びで羽をバタバタさせ、小さな目に涙を浮かべて喜んでいた。その姿を見たみそさざいは、「やっぱり来て良かったな。」と思うのだった。

はじめは、うぐいすの家に行ったみそさざいが、やまがらの家に行くまでに悩み葛藤する心情や、「やっぱり来て良かったな。」と述べるみそさざいの心情など、みそさざいの心情の変化を通して、相手を思うやさしい心に迫りたい。

3) 本時の学習指導

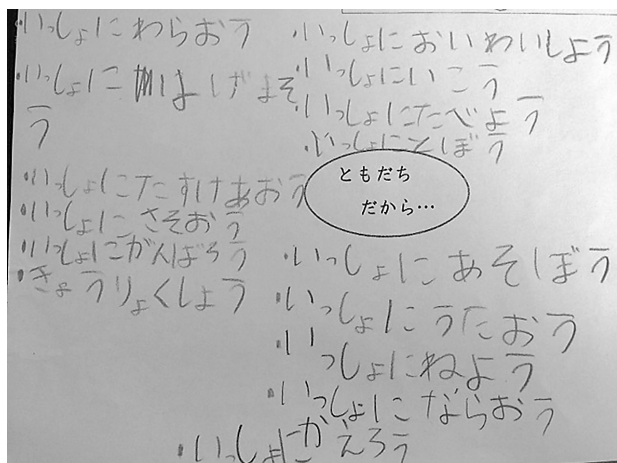
(1) 本時のねらい

みそさざいの心情の変化と行動を通して、友達に寄り添い友達のために何かをしたいという心情を養う。

(2) 学習指導過程

	○主な発問・予想される児童の反応	◇留意点 ☆評価
導入	1 友達だから…について考える ○「友達だから…」この「…」に言葉を付け足す。	・友達について、自分なりの考えを持たせる。 ・ワークシートの活用① 鉛筆で書かせる。
展開	2 教材を読んで話し合う ○みそさざいは、どんな思いでみんなと一緒にうぐいすの家に行ったのだろう。 ・みんな行くから ・やまがらの家には誰か行ってくれるだろう ・でも、迷うな… ・後で行けばいいや みそさざいが、やまがらの家にとんでいったのはどうしてだろう。	・迷いながらもみんなに合わせてうぐいすの家に行ったみそさざいの思いに共感させる。
	◎そっとうぐいすの家を抜けだし、やまがらの家へ飛んで行ったときのみそさざいの気持ちを考えよう。 ・かわいそうだから ・もしかしたらひとりぼっちかもしれない ・自分がやまがらだったら、悲しい ・やまがらと一緒に楽しみたい ○「やっぱり、来てよかった。」といったときの、みそさざいの思いを考えよう。 ・迷っていたけれど、来てよかった。 ・やまがらが喜んでくれて、よかった。 ・最初から、来ればよかった。	・役割演技をさせることで、言葉だけでは表せない思いを表現できる場を設ける。 ①グループごとに演じさせる。 (1人：みそさざい、他の3(4)人：小鳥たち) ②何名か指名し、教師と児童のやりとりをする。 ・児童：みそさざい役 ・他34名：みそさざい役をしている児童の思いを理解するため聴く。 [動作化中の教師の切り返し発問] ・みそさざいと小鳥たちの違い ・かわいそうだから行くのが友達なのか ・本当はみそさざいも、うぐいすの家にはいたかったのではないか。 ☆みそさざいの心情の変化を考えることができていないか。 ☆迷っていたけれど、やまがらに寄り添い、やまがらへのやさしい心を行動にうつしたことから生まれた友情を考えることができたか。
	3 自己を見つめる活動② ○友達の中で、「友達だから○○したいな。」と思うことはありますか。 ・一緒に遊ぼうって誘いたいな。(本当は遊びたいって思っているかもしれないから)	・ワークシートの活用② 導入で書いたワークシートに書き加える。(赤鉛筆で書き加え、導入時との変化を見やすくする。) ・導入で聞いた時との児童の心情の変化があれば、その理由を聴き価値の深まりを実感として押さえる。 ・行動に対する思いを考えさせる。
終末	4 教師の説話	・児童の価値の深まりをまとめる。

4) 授業の実際 (子どものワークシートより)



【評価について】

導入(鉛筆)と自己を見つめる活動(赤)で同じような問いを設けた。すると、導入でも「いっしょに」という言葉を大切にしていた子どもは自己を見つめる活動でも「いっしょに」という言葉を再度用いた上で、友達について広げていた。授業前の友情に対する自身の価値を学習を経て深めている様子としてとらえることができるのではないだろうか。

4. 1. 2. 1. 今後の方向性と課題

今回は教材の中にある台詞について考えるのではなく、動作を通して考えるみそさざいの思いに焦点を当てた。「どうしてやまがらの家に飛んで行ったのか」という問いに対して、実際に演じてみることにより、様々な視点で多面的に考えることができた。自己を見つめる活動では、学習を経て子どもの思考の深まりが見えてきた一方、具現化までは至っていない。実際の生活の場面でどのように「いっしょに助け合う」のか「いっしょに頑張ろう」なのか、はっきりしなかった。より自己のあり方に関わる発問やワークシートの活動の検討が課題である。

4. 2. 小学校高学年の実践

4. 2. 1. 小学校5年生 教材名「ブランコ乗りとピエロ」(きみがいちばんひかるとき 光村図書出版)

1) 主題名: 広い心をもって (B⑪ 相互理解・寛容)

2) 主題設定の理由

(1) ねらいとする価値について

人の考えは多様であり、それが豊かな社会を作る原動力ともなる。そのためには、多様さを相互に認め合い理解し合いながら高め合う関係を築くことが大切である。自分とは異なる意見や立場を広い心で受け止めて相手への理解を深めることで自らを高めていけることができる。そこで大切な内なる心は寛大な心と謙虚な心である。寛大な心とは、相手の過ちを赦すことができる心である。そして、謙虚な心とは自分も同じような過ちを犯すことがあるからと自己を見つめることができる心である。この二つの心が一体となった時に広い心が生まれ、それは人間関係を潤滑にすることができると思う。

人はややもすると、自己本位に陥りやすい弱さをもっている。相手の意見を聞かなかったり、相手の過ちを許せなかつたりする。しかし、そうした自己像がはたして社会で生活する上でよりよい自己像であるのだろうか。子どもたちにどうして謙虚な心、寛大な心は他者との生活を送る上で大切なのかを理解させることを通して、それらの心を身に付けていきたいという意識を育てたい。

(2) 子どもの実態より

5年生になり、クラス変えをした学級である。子どもたちは日々新しい友達、新しい先生という環境の中でそれぞれが自分の居場所を探して生活している状況である。友達相互の関わりも少なく、まだまだ前の学級の子ともたちと一緒にいる。先週1週間、林間学校に行き、少しずつではあるが、友達同士の関わりも出てきた。そうした中で、まだまだ関係性として「謙虚さ」「寛容さ」を求められるような状況ではない。しかし、子どもたちそれぞれの性格を考慮していくと、これからそれらが求められることが少なからずあるだろう。そうした時に謙

虚な心、寛容な心で相手と接することができる心豊かな人間を目指すことを子どもたちには望みたい。本時では、謙虚な心、寛容な心の理解を通して、子どもたちの広い心を育む。

(3) 本時の教材について

主人公のピエロはサーカスの花形であるブランコ乗りのサムが許せなかった。目立って、時間をのばすサムの様子にいつも腹を立てていた。しかし、サムの演技に対する思いがピエロを変え、そして、サム自身をも変えていく。児童の実態を鑑みて、「寛容」「謙虚」という点において、ピエロとサムはどのように変わったのかを考えることを通して、広い心をもつことの大切さを考えさせていく。

3) 指導計画「相互理解・寛容」の指導の流れ(各1時間扱い)

時期	主題	資料	モチーフ
1学期	広い心をもって	ブランコ乗りとピエロ(光村)	問題追求型
2学期	謙虚の心をもって	すれちがい(文溪堂)	相互理解

4) 本時の学習指導

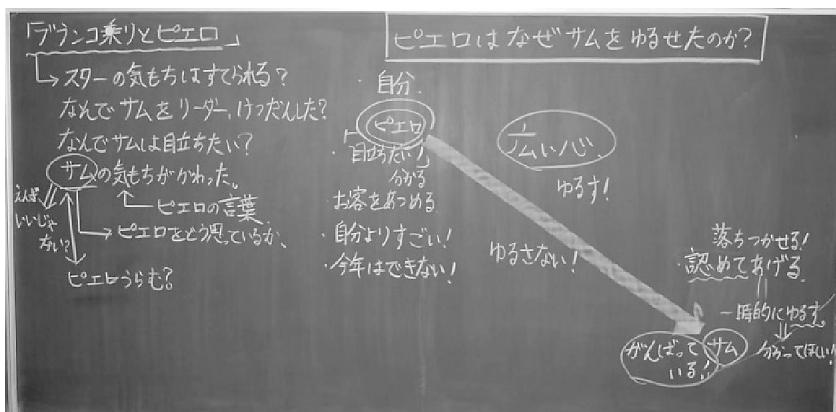
(1) 本時のねらい

○相手の考えや意見に意識を向け、広い心で相手を尊重する心を育てる。

(2) 学習指導過程

過程	予想される児童の活動(○主な発問)	○指導上の留意点 ☆評価
つかむ	1. 相手を「受け入れるかどうか」の個々の考えを視覚で捉えさせ、自分の立ち位置と相手の立ち位置の違いに気付かせる。 ○自分ばかり目立とうとする人を受け入れますか。 ・受け入れない。だってなんか嫌だ。 ・受け入れる。自分もそういう気もちがあるから。	○子どもたちがより具体的に把握しやすいように、子どもたちの生活体験での出来事を提示する。 ○ネームプレートを貼り、自分と友達の考えや思いの違いに気付かせる。
教材を中心に考える	2. 教材「ブランコ乗りとピエロ」を読んで話し合う。 ①資料を読んで、考えたことや思ったことはどんなことですか <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">どうしてピエロは許すことができたのだろうか。</div> ②ピエロはサムの態度にどんなことを思っただろうか。 ・自分だけずい。 ・僕も目立ちたい。 ③どうしてピエロはサムをゆるすことができたのでしょうか。 ・サムのがんばっている姿に感動した。 ・自分よりすごい。 ・仲間だから。 ④「相手をゆるす」ことはどうして大事なのでしょうか。 ・自分もそういう時があるから。 ・もっと仲がよくなりたいたいから。	○教材を範読する前に感想を聞くことを話し、教材を聞く意図をもたせる。 ○感想を活用しながら教師がテーマを導く。 ○サムの勝手な行動に腹を立てさせるピエロの気もちを考えさせることによって、相手をゆるすことの難しさについて理解させる。 ○多様な意見に触れさせるため、小グループでの話し合いの時間を設定する。 ○「自分なら」と発問することによって、道徳的価値を自分事として捉えさせる。人物と自分を比較させてより自己を見つめさせる。 ○テーマについての話し合いから、さらに道徳的価値についての理解を深めるために、「相手をゆるす」ことの意味について考えさせる。 ☆謙虚な心とはどういう心であるかを理解することができたか。
見つめる	3. 自分の生活を振り返る。 ○今日のお話から、自分ばかり目立とうとする人を受け入れるかどうか、もう一度考えましょう。 ・やっぱり相手も分かってくれることがあるから受け入れるかな	○道徳ノートに記入させる。 ○導入で貼られた自分のネームプレートと今の自分を比較して書かせる。
まとめる	4. 教師の話聞く。	○余韻をもって終わることができるような題材を用意する。 ☆広い心で相手を尊重する心を育てることができたか。

5) 授業の実際



本実践では、道徳的問題を教材の主人公の心情から生み出した。ねらいとする道徳的価値である「寛容」の心をもって行動できた主人公のその行動の真意について追及していくことでねらいに迫ることとした。導入では、ネームプレートを用いて、「目立とうとする人を自分は受け入れるか」を自分事として捉えさせ

せた。ネームプレートを一人一人が貼ることによって、「寛容・謙虚」のねらいについて自分の現在の考えを見つめることができた。展開では、まず、教材についての感想を問うてから「ピエロはなぜ許せたのか」という問題を提示した。グループでの話し合いを行ってから考えを交流し合ったが、はじめは「サム」の行為について許せない意見が多く出たが、「ピエロはなぜサムを許せたのだろうか」と問うと、「自分なら許せないけど、サムが頑張っていたから」と自分ならどうするのかという視点に立って自分の考えを伝える子も出てきた。サムの努力をする姿に共感したピエロの思いや自分よりも技ができるサムを認めるピエロの気持ちについて、子どもたちは話し合いを重ね、その中から本時のキーワードでもある「広い心があったから」という発言が子どもたちから出た。その言葉に子どもたちも一応の納得を得たようであった。授業のまとめとして、導入で問うた「目立とうとする人を自分は受け入れるか」をもう一度問い、その考えをワークシートに書かせて、授業は終わった。

4. 2. 1. 1. 研究の振り返り

教材における主人公の行為を授業の問題としたため、子どもたちも自分ならどうするかという視点にたって考えることができた。導入とまとめを同じ発問にしたため、子どもたちも客観的に自分の考えが教材を通した話し合いを経て、どのように変化し理解することができた。教材についての感想から授業で追求していく教材についての問いを設定したため、子どもたちも主体的に問題に取り組むことができた。

評価についてだが、本時では導入と「見つめる」で子どもたちに問うた「自分ばかり目立とうとする人を受け入れられるか」と問いに対して一人一人がどのように考えているかを評価としていく。子どもたちのワークシートを見ていくと、だいたいの子が導入と同じ立ち位置（受け入れるかどうか）である。教材を通した話し合いによって考えが大きく変わったというわけではない。ただ二人の子が「受け入れる」から「受け入れられない」に考えが変わっていた。「大王が来ていたら許せない」「自由にするなら責任を取ってもらおう。でも勝手に責任を取られたら不快になる」と答えていた。授業を通して、子どもたちは最初は曖昧に考えていたことに対して、教材を用いて話し合うことによって、自分の考えをより明確に持つことができた。

4. 2. 2. 小学校5年生 教材名「純の犬は死なないペット」(自作資料)

1) 主題名:「命の尊さとは」(D-18生命の尊さ)〈関連価値〉動植物愛護

2) 主題設定の理由

(1) 児童の実態

5年生になって一回目の生命尊重の授業である。子どもたちの普段の生活の様子では、男女ともに今人間関係を構築していく中で、友達に対しての言葉遣いの中に時々生命観を疑うような言葉を発する子もいる。意味の理解は分かっているもののたいして深い意味もなく使っていると考えられる。その都度指導は繰り返しているが、

子どもたちには生命についても一度見つめさせる必要がある。

四回の犬との体験を終え、子どもたちの様子としては、初回よりも明らかに犬と接することを楽しく感じていることがうかがえる。自分の担当している犬に、直に触れ合ったりお世話をしたりする中で、愛着が生まれているからであろう。本授業では、そういった愛着を基に「命とは何なのか」を一人一人が犬との体験を想起しながら、自分の生命についての考えを見つめさせていきたい。

(2) ねらいとする道徳的価値について

生命は多くの生き物に宿るかけがえのないものである。生命があるからこそ、生きとし生けるものは活動することができる。それは犬でも人間でも同じである。生命を大切にしようとする意識を育むことは自分を大切にしている生き子の育成に直接つながることである。小学校学習指導要領解説特別の教科道徳編の生命尊重についての内容項目には「生命が多くの生命のつながりの中にあるかけがえのないものであることを理解し、生命を尊重すること」と高学年では明記されている。自分の命は多くの生命とつながっている、強いて言うなら支えられていることを犬という体験や教材を生かして考えさせていく。

3) 研究テーマとの関連

(1) 資料の開発

本時は、犬との体験活動によって子どもの生命尊重の心を育てる成果を期待している。本時は、体験したことを深化させるねらいのもと行う。そのため、資料の内容も犬に関する内容とした。具体的には限りある命をもった犬と死なない犬（ロボット）のお話である。その両者の違いについて話し合う中で、子どもたちが犬との体験活動で芽生えてきた犬への愛着を自分の生命観を新たに捉え直すきっかけとし、生命を大切にしようとする意識を育みたい。

(2) 思いを引き出す話し合い活動

子どもたちが学習の課題に対して自分の考えをもち、他者と交流する中で新たな価値を見出すことができるような話し合い活動の場を設定する。本時では、時間内に多く自分の考えを伝えることができる場（小グループ）を設定していく。

4) 本時の学習指導

(1) 本時のねらい

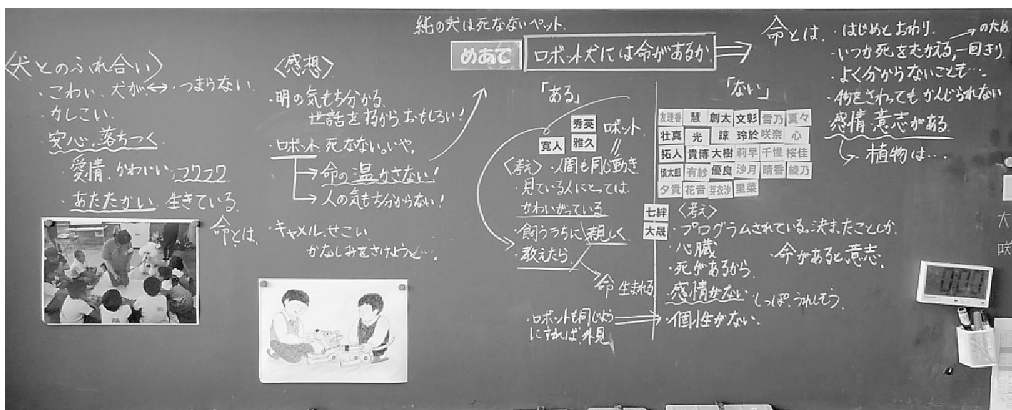
二つの犬の違いを通して、命があるとはどういうことであるかを理解させ、生命を大切にしていこうとする心情を育てる。

(2) 本時の展開

主な学習活動（・予想される児童の反応）	○留意点 ☆テーマとの関連 ※評価
1. 犬の体験の感想を問い、生命について考えを見直す。 ・犬の体験は楽しい。かわいい。	○子どもたちの感想をただ聞くだけではなく、生命について考えを見直すため、その感想の根拠を問い、本時のテーマを作っていく。
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;">命について考えよう</div>	
2. 資料「純の犬は死なないペット」を読んで話し合う。 ①資料からどんなことを考えましたか。 ・純の犬はなんか嫌だ。 ・死なない犬はいい。	○一人一人にプリントを配布して範読する。 ○感想から本時のテーマを設定する。
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;">死なない犬には命があるのだろうか</div>	
②明は純の犬を見てどんなことを考えましたか。 ・犬は生きての方がいい。 ・ロボット犬だとなんか嫌だな。 ・ぬくもりが感じられない。	○明が感じている純の犬についての思いに気付かせ、死なない犬についての理解を深める。

<p>③死なない犬には、命があるのかな</p> <p>〈ない〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ぬくもりがない ・悲しみが出てこない <p>〈ある〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・周りの人の思いが募れば ・人を喜ばせることができるから <p>3. 今日の学習から命について考える</p> <p>○命について考えたことはどんなことですか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・命には限りがあるから、素晴らしい。 ・ぬくもりがあるということは命があるということ。 <p>4. 教師の話を書く</p> <ul style="list-style-type: none"> ・命についての話をする。 	<p>○ネームプレートで自分の立場を客観的に捉えさせる。</p> <p>☆小グループで話し合う。司会者を立て、質問をし合う時間を多くとる。</p> <p>○全体での話し合いでは、それぞれのグループにダウトを入れて、それぞれの考えの根拠に迫る。</p> <p>○二つの話し合いの意見を大切にしながら、命について多様な考えを引き出し、命の大切さにせまる。</p> <p>○ノートに書かせる。</p> <p>※生命について、二つの犬の違いから生命について考えを深めることができたか。</p> <p>○余韻が残るようにする。</p>
---	--

5) 授業の実際



本時では、道徳的問題をねらいとする道徳的価値である「命」の理解を深める問題と「ロボット犬には命があるのか」という教材についての問題の2つを設定した。授業では教材

についての感想を問うと、「ロボットには命がない」という意見が出された。子どもたちは事前に動物(犬)との体験活動を行っており、それぞれが「命には温かみがある」ということを体験から実感しているため、教材にある命についての矛盾に子どもたちが意識を向けることができた。授業の展開では「ロボット犬には命があるか」ということを小グループで話し合いを行ってから、全体で意見の交流を行った。「ある」と答えた児童は少なかったが、「ロボットを飼っている人にとっては、可愛い」「飼ううちに親しくなる。愛着が生まれる」といった意見が出てくると、「ない」と答えていた子の何人かは「確かに」「そう思うと迷ってくる」と友達の見解から自分の考えを見直していた。授業のまとめとして、「命とはなんだろうか」と問い、道徳ノートに考えを書かせてから発表させた。中には、「よくわからなくなった」と答えている子もいた。「命には感情、意思がある」といった子の意見に対して、「それでは、植物とかにも命があるの?」と問い返す子がおり、子どもたちの中で新たな問いが生まれた。

4. 2. 2. 1. 研究の振り返り

2つの問題を取り入れたことにより、子どもたちは興味関心をもって考えをめぐらすことができた。しかし、2つの問題をグループ活動を入れて話し合いを行うと時間がかかった。2つの問題の設定の難しさも感じた。教材自体が子どもたちに問いを投げかける設定になっているため、子どもたちも何について話し合えばいいかわかりやすかったようで、主体的に取り組むことができた。

評価としては、「命についての子どもたちの理解」をワークシートから見ていく。子どもたちのワークシートには、「次の命につなげていくもの」「一人一つしかもてないもの」「ぬくもりがあるもの」「始まりと終わりがあ

る生命体」「何かの目的を成し遂げるためにあるもの」「個性と感情がある」「一番大切なもの」「優しい、思いやりの気持ちがある」「何にでもあるもの」「未知のもの」「優しく見守ってあげないといけない大切なもの」など、命に含まれているその多様性に関わる内容が多く書かれていた。中には「よく分からなくなった。」と、話し合いを通して自分の考えを見つめ直したからこそ、さらに理解が進むであろう内容もあった。

4. 3. 知的障害特別支援学校の実践

4. 3. 1. 高等部1年生「私のハート」(日本ピアサポート学会)

1) 主題名:「私のハート」1-(5) 個性の伸長

2) 主題設定の理由

(1) 生徒の実態

本学級は男子6名、女子4名の10名の生徒が在籍している。10名のうち3名が幼稚部から、4名が中学部から、3名が高等部から本校に入学した。そのため、中学部や高等部から入学した生徒の中には、通常学級や特別支援学級に在籍していた生徒がおり、知的発達水準や障害種(知的障害、ダウン症、自閉症、協調性運動障害など)のみならず、学習経験についても非常に幅の大きい集団である。

高等部入学当初の4月は、外部入学者だけではなく内部の生徒も不安や緊張が強い様子が見られ、中には幼い行動を見せがちな生徒もいた。しかし、日常の授業はもちろんのこと、1、2学年合同の林間学校や、就労に向けての現場実習、学校全体で行う学習発表会等の活動を経験して、学級集団としてのまとまりは出来つつあるが、中には皆の前で自分の気持ちを表出するのが苦手な生徒もいる。

(2) 題材と指導の手立てについて

生徒が自己開示の快感を味わい、クラスメートの心に触れ、その「違い」を知ることで、親近感、安心感が増し、その中で自己を見つめることができるよう、ハートの図を描画する活動(日本ピアサポート学会)を行うこととした。

授業では、生徒に「美術の授業ではないため、上手い、下手が大切ではないこと、点線からはみ出しても、ハートの外に何を描いても良いということ、表に名前を書かないこと」を初めに伝えるようにした。また、授業の後半に、生徒それぞれの「私のハート」を黒板に掲示し、お互いに質問や感想、気づいたことを発表する場面を設けることで、自分と他者との「違い」に対する気付きを促すとともに、その中でじっくりと自己を見つめる時間をとり、自己肯定感につながるようにしていきたい。

3) 指導計画


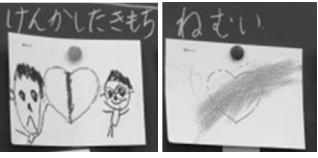
指導回数	題材・内容
第1回	「リレーの選手になれなかったけれど」(中学年1-(5) 個性の尊重)
第2回	友だちの良いところ・がんばっているところ(前期の目標についての振り返り)
第3回	私のハート
第4回	友だちの良いところ・がんばっているところ(後期の目標についての振り返り)

4) 本時の学習指導

(1) ねらい

- 自由に描画・彩色して自分の気持ちを表現することができる。
- 友だちの発表を聞いて、自分と相手との違いに気付く。

(2) 本時の展開

学習活動	指導内容	・指導上の留意点 ☆心を育む手立て
<p>① 始まりの挨拶をする。</p> <p>② ハートを描画する。</p>  <p>③ 自分の気持ちを書く。</p> <p>④ 発表する。</p>  <p>⑤ 終わりの挨拶をする。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・姿勢を整え、挨拶をする。 ・好きなクレヨンを選んで、自由に色を塗ったり絵を描いたりする。 ・ハートを描いた時の気持ちを発表する。 ・皆のハートを見ながら、質問、感想、気付いたことを発表する。 ・姿勢を整え、挨拶をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・美術の授業ではないので、上手い、下手が大切ではないこと、点線からはみ出しても、ハートの外に何を描いても良いということ、表に名前を書かないことを生徒に伝える。 ・タイマーを設定し、途中で終わりにならないように早めに予告する。 ・自分で考えて気持ちを書くことが難しい生徒には、イラストや文字を提示する。 ・発表することが、無理にならないよう配慮する。 ☆友だちの良いところにつながるような発言が出るように声かけをする。 ☆自分と友だちの違いについて触れる。 ・日直が号令をかけるように促す。

5) 授業の実際



生徒それぞれが好きな色を選び、意欲的にハートを描く様子が見られた。画用紙の裏には、「けんかしたきもち」「ねむい」「うれしい」「いいきもち」「あかるいきもち」「うれしいきもち」等と短い言葉で表現していたが、発表の場面では「お母さんとぼくがけんかした気持ちです。」「私の気持ちを黄色と黄緑で表してみました。みんながいて楽しい気持ちです。」「ピンクと水色で塗りました。楽しくて幸せな気持ちです。」「緑で塗りました。草原で遊んでいる気持ちです。」「ぼくの色はこの色です。いい気持ちです。」「私はハートの色をピンクで表しました。うれしい気持ちだからです。」と具体的に発言する様子が見られた。また、言葉で表現することが難しい生徒には教員が声をかけ、イラストと文字のカードを見せたり、iPadで本人の気持ちを表す動画を流したりしながら、選択できるようにした。「いらいら」「ダーク」「つめたい」とハートを3段階に色分けした生徒は、友だちの前で発言することを躊躇していたが、授業後に自分の気持ちをこっそりと教員に教えてくれた。本人なりの言葉で心の葛藤を表現し、青年期特有の精神状態であるように感じた。今後の成長を見守り、自己理解を含めた本人への支援について検討していきたい。

授業終了後は、生徒たちの中から自然と拍手が起き、あたたかい雰囲気です。授業を締めくくることができた。数日後に他の場面で「ぼくの今の気持ちは赤です。」と色で気持ちを表現する生徒、少しずつではあるが、自分の気持ちを言葉で相手に伝えることができるようになってきている生徒、友だちの意外な一面を知り、仲間意識が育っている生徒がいる。それぞれの個性を生かしながら、他の人や社会との関わりが円滑となるよう願っている。

4. 2. 1. 1. 今後の方向性と課題

ハートを描画する活動は、知的発達水準や障害種が異なる特別支援学校の生徒にも取り組みやすい題材であった。授業の後半に全員のハートを黒板に掲示し、友だちへの質問、感想、気付いたことを発言する時間を設定したが、生徒の人数が10人と少なく、みんなの前で発言することに抵抗がある生徒にとっては、誰のハートなのかが特定されやすくなってしまいう結果となったので、今後検討していきたい。

4. 3. 2. 高等部1、2年生 教材名「相手に思いを伝えたい」（私たちの道徳小学校5、6年生）

1) 主題名：「気持ちのいい毎日を」2-(2) 思いやり・親切

2) 主題設定の理由

(1) 生徒の実態

高等部1年生2名、2年生8名の編成で授業を行った。対象生徒のほとんどは、昨年度「私のハート」という題材で自分の気持ちを色や言葉で表現する学習を行った。その中で、積極的に挙手して発言する生徒、相手に自分の気持ちを知られたくないという消極的な生徒がいた。集団としてまとまっていけるもの、友達に世話を焼いてしまう生徒、人との距離がうまくつかめずにいる生徒もいる。それぞれの生徒が日常生活や授業、学校行事等で友達と協力する経験をし、校外における実習では他者と関わりながら社会人になるための学習をしている。生徒の実態は幅広く、「自由」「責任」「思いやり」「誠実」「感謝」という5つのキーワードを提示してはいるものの、言葉の意味の理解までは難しい生徒がほとんどである。そのため、実際に自分達が体験したことについて考えられるよう工夫しながら、授業を進めていく必要がある。

(2) 題材と指導の手立てについて

本題材では、「私たちの道徳 小学校5、6年」に掲載されている資料をもとに、生徒の実態に合わせた内容に創作した。また、高等部2年の学級目標①自分で考え、行動しよう②自分の力を発揮し、可能性を広げよう③自分も相手も気持ちよく過ごそうにも関連させ、生徒が実際の生活を振り返ることができるようにした。口頭のみではストーリーの理解が難しい生徒がほとんどのため、視覚的な教材を手がかりに友達同士で意見が出し合えるようにしている。4コマ漫画や表情カードを用いてペアで話し合いを進め、必要に応じて教員が支援しながらどの生徒も発言し、発表できるよう配慮していく。さらに、昨年度学習したことを活かして主人公の気持ちを色で表すと何色になるのかを考えて板書の一部として掲示し、イメージしやすくなるようにしていきたい。本題材を通して、まずは生活習慣を見直すことから始め、実際に起こった林間学校での出来事を交えながら自分や相手が良い気持ちで過ごすためにはどうしたら良いかを考えて行動するきっかけとなることを期待している。

3) 指導計画

指導回数	題材	内容
第1回	気持ちのいい毎日を①	自分の1日は自分で作る 1-(3) 自由・自律・責任
第2回	気持ちのいい毎日を②	明るく楽しい毎日を過ごすために 1-(4) 誠実・明朗
第3回	気持ちのいい毎日を③	相手に思いを伝えたい 2-(2) 思いやり・親切

4) 本時の学習指導

(1) ねらい

- 登場人物の気持ちについて考えたり、その気持ちを色で表現したりすることができる。
- 「思いやり」について自分や友達的生活を振り返り、発表することができる。

(2) 本時の展開

学習活動	指導内容	指導上の留意点
①挨拶をする。 ②前時までの振り返りをし、本時の説明を聞く。 ③「体育祭のリレー」の話を聞き、主人公の気持ちを考える。(ペアで話し合い) ④主人公の気持ちについて発表し、色で例える何色になるかを考える。 ⑤林間学校での出来事について、その時の自分の気持ちと宿の方の気持ちを考える。(ペア) ⑥これまでの生活で「思いやり」と感じる行動について発表する。 ⑦終わりの挨拶をする。	<ul style="list-style-type: none"> ・授業の始まりを意識する。 ・「自由」「責任」「誠実」の3つのキーワードが分かる。 ・話し合いの中で、相手に思いを伝えたつもりが悲しい思いをさせてしまうことがあることに気付く。 ・話し合ったことを発表する。 ・ハートに色を塗る。 ・話し合いの中で、自分の体験を想起し、宿の方の思いやりに気づく。 ・教員や友達の話聞く。 ・自分や友達の良いところに気付く。 ・授業の終わりを意識する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・日直が号令をかける。 ・キーワードに近い発言があった場合は賞賛し、正しい言葉につなげる。言葉がなかなか出ない場合や、イメージが難しい場合は具体例を挙げ、理解を促す。 ・まずはストーリーを口頭で説明し、その後4コマ漫画を配布する。4コマ漫画のイラストに沿って、指さしをしながら再度ストーリーを確認するよう促す。 ・STは話し合いのヒントになるような声かけをする。 ・発表者が同じ生徒に偏らないようにする。 ・生徒F、JはiPadや絵カードを手掛かりに、意見を出せることができるようにST1が支援する。 ・4コマ漫画を見て、自分の体験を振り返るきっかけとする。林間学校の写真を提示し、イラストと実際の出来事を一致させる。 ・まずは教員が「肩をたたきだけで相手を励ますことができること」「そっと傘を差しだしてくれると嬉しいこと」等の他者への気遣いは行動だけでも示せるという具体例を挙げる。その後、生徒からの発言を引き出す。 ・日直が号令をかける。

5) 授業の実際



ストーリーを読んで、相手を思ってかけたつमोरの言葉が、正しく伝わらなかったということに気付いた生徒は一部であった。そのため、4コマ漫画を用いてペアでの意見交換を行い、話の意味を理解できるようにした。授業の後半では、林間学校で山中湖をハイキングした際に、強風と雨で寒い思いをした時に宿の方がココアを用意して下さり、心も体も温まったエピソードを写真とともに振り返り、その後、自分達が考える「思いやり」についてのエピソードを発表した。「物を落とした時に、拾うことを手伝う。」「具合が悪い人に声をかける」「家の人の手伝いをする」という発言があった。相手を思いやっているつもりでも誤解をされてしまうことがあるので、言葉をかける時には気を付けなければいけないことに関しては生徒の中から新たな問いが生まれた。そして、「雨が降っている時に傘を持っていない人がいたら、そっと差し出すこと」など、言葉をかけることが思いやりのすべてではないことをまとめとした。

4. 2. 1. 2. 今後の方向性と課題

「思いやり」の行動については理解している生徒が多いように感じた。ただ、言葉に関しては余計な一言で相手を不快にさせてしまうことがあり、その意味を理解できるかは本人の知的発達水準や障害種によって異なるため、その都度ていねいに伝えていかなければいけないと考える。日常生活の中で「思いやり」の行動や言動が見受けられた時には、賞賛し、生徒に気付かせるようにしている。

5. 研究の成果と今後の課題

小学校低学年、高学年、知的障害特別支援学校高等部において、それぞれの子どもたちの発達段階を踏まえた「問題解決的な学習」に取り組んできた。「問題解決的な学習」とはいかなるものであるかを「研究の内容」として4つ示し、それぞれの授業で手立てとして組み入れてきたが、教師が基礎理論を固め、それぞれの授業で実践したため、学年ごとある程度の授業としての型を示すことができたと感じる。「道徳的問題」が明らかになった問いであると、子どもたちの話したい気持ちを引き出すことができ、子どもたちも学習に対して主体的に取り組むことができた。教師が子どもたちと共に考えたいことを明確にし、子どもたちに問い返すことは、主体的な学びを作る上で非常に重要であることが分かった。ただ「道徳的問題」が教材について問うことになると、道徳の時間の特質でもある、自分の生き方について考えを深めるという点については、十分に深めることが難しかった。授業の振り返りの中で「今日の学習で考えたこと」と問うことは一般的な展開としてあるが、「考えたこと」が「自分の生き方」につながるのか疑問が残った。間にさらに問いかけや教材が必要であると感じた。

評価の視点についてだが、ある程度それぞれの実践者にその内容については任せてあるが、共通していることは「まとめ」と「教材」である。つまり評価の仕方として、「まとめ」（学習指導過程の最後）で何らかのワークシートを用意し、子どもたちの学習の履歴を残すことが共通していた。このことにより、子どもたちの一時間での学びについて客観的に理解することができた。今後は一時間ではなく、その子の「道徳性」をいかに見取り、子どもたちの「成績」としてどのように記述していくのか、年間を通した見取りの仕方について考えていく必要がある。2年次はその研究について深めていく。

6. 参考文献

小学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編 平成27年7月

「特別の教科 道徳」の指導方法・評価等について（報告）平成28年7月22日道徳教育に係る評価等の在り方に関する専門家会議

道徳教育9月号2015 道徳授業で「問題解決的な学習」にチャレンジ 明治図書

「問題解決学習」と心理学的「体験学習」による新しい道徳授業 諸富祥彦 著 図書文化

問題解決の心理学 安西祐一郎 中公新書

授業デザインの最前線Ⅱ 理論と実践を創造する知のプロセス 高垣マユミ編著 北大路書房